

アメリカ発! 市民のなかに吹く風

～ THE WIND OF AMERICA 9月4日号 ～

ツアー2日目。長時間の飛行機による旅の疲れも残る(?)中、本格的に研修が始まりました。

在ニューオリンズ日本国総領事の坂戸氏、バイロン・ハレル氏をはじめとするバプティスト・コミュニティ聖職者協議会の皆さん、ニューオリンズ市復興管理局のデイビット・コーディー氏から、2005年に大きな被害をもたらしたハリケーン・カトリーナによるニューオリンズ市の被災と復興の状況についてレクチャーを受けました。また、被害の大きかった住宅地にも実際に足を運んで、未だに残る災害の傷跡を視察しました。

夕食は、ニューオリンズの郷土料理であるケイジャン料理(シーフード)に舌鼓、ネオンが輝きジャズが流れる街に繰り出すなど、夜の視察にも積極的に取り組みました。(平野)

在ニューオリンズ総領事館

在ニューオリンズ総領事館坂戸勝氏から、復興計画づくりの過程でかつて無かった近隣住民組織ができたことや、個人住宅への復興支援制度、市が教育の新制度に着手したことなどを伺いました。被害が拡大した原因には市民の47パーセントが読み書きをできず避難勧告を聞いても避難する行動に結びつかなかったことがあるといいます。市民からは公立学校の教育水準や教員の資質に対する批判は強いといい、州政府は教育の管轄権を市の教育委員会から、州の任命による教育長に変更したり、チャータースクールという新制度を導入するなどの改革を行っています。この制度は公教育の予算を入れながら政府の規制を受けずに学校運営ができるもので、この結果、教師の意欲も高くいい教育が行えているようです。課題は多いといいますが、町を愛し、町の課題に取り組む市民は多いことが希望につながっているといい、今後も行政の立場から支援をしていきたいと話してくださいました。

清水和良

総領事館はビルの20階。目の前にスーパードームを見下ろす場所に建っています



た、治安では、日本でも始まる陪審員制度の陪審員を教育するための資金支援活動を報告されました。

活動は街のコミュニティには無くてはならないものになっています。私たちの東京災害ボランティアネットワークに見るような他団体とのネットワークの構築が課題となっているように感じました。

佐々木実



写真などを使って、視覚的に様々な資料を見せてくれました。左がバイロン・ハレル氏

ニューオリンズ市復興管理局

ニューオリンズ市復興管理局のデイビット・コーディー氏よりカトリーナ被災後の復興プログラムについてお話を聞きました。特に住宅についての復興事業にはもとの住居に戻るための資金問題やコミュニティに関する問題等があり、まだ完全な復興の道にはまだまだ遠いと感じた。

また、質疑応答では参加メンバーより多数の質問があったが、次回大きなハリケーンが来ても地区によりまた同じような被害が起こりうるとの事でした。

復興には住宅再建のための洪水保険加入が必要であり、防災に関するプログラムも必要であると感じた。

友田英之

バプティスト・コミュニティ聖職者協議会

オフィス街のビル29階にある事務所は、ミシシッピ一川を正面に街を展望するお洒落なところです。代表のバイロン・ハレル氏は、スマートな紳士で懇談のために6名の専門スタッフをそろえて待っていました。健康、教育、治安など具体的な活動報告で特に、公立学校と同じに税金でまかなうチャータースクールは、公立学校の出来ない独自の教育方法を選ぶことで存在を示し、資金支援を行っています。

医療健康の面では、ハリケーン後に病院が再開出来ない地区の教会にボランティア看護師を派遣する活動、ま



コーディーさんの話を聞いたのは総領事館の会議室。窓の外はニューオリンズの展望が一望できました

参加者の声①

今回の「研修」において、初めて直接的に被災を受けた街に足を踏み入れた。天候は晴れ。ヨットが多く係留されている港を抜けて水辺まで。

やや年配の男性 2 人が魚釣りをしている姿を見かけた。ちょうど「ドラムフィッシュ」という大きな魚を釣り上げたところだった。声をかけると「カトリーナ」の話の聞かせてくれた。「みんないなくなったよ。魚たちはそのままだけど・・・。」きっとこの二人はあのカトリーナ以前も変わらずに魚釣りを楽しむ日々があったのだろう。

水辺から丘のほうへ目を向けると、家々が立ち並んでいる。しかし、人影はない。外見にはどの家にも地面から 2m の高さにスプレーでマークがされている。浸水の高さを示したマーク。そばに立ってみると、自分の頭を越えるほどの「水」があった。その時、この家の人の想いや胸のなかを思うと、心が締め付けられた。

この街はこれからに向けてたくさんの人々が動き出すのだろう。様々なパワーがたくさん必要な時に、この街の人たちが持つ「ハートパワー」を心から大切にしていってほしいと心から願っている。あの 2 人の魚釣りを楽しんでいた笑顔のように。

坂上幸一郎



ポーチャートレーン湖の湖畔で釣り人と一緒に写真におさまる坂上さん

参加者の声②

昼食前、ハリケーン・カトリーナの被害が最も大きいといわれる地区でバスから降り、周辺を視察することができた。

バスの車窓から見るニューオリンズの街は、2 年が経

ったとはいえ、あまりにも「被災」を感じる事ができなかった。平屋の家屋が続き、日本人から見ると充分すぎるほどの前庭、その中で唯一違和感があるのは、玄関前に無造作に置かれたトレーラーハウスのみ。その街区を漫然と眺めるだけでは、アメリカ最大級の被害をもたらしたハリケーンの被災地とは思えなかった。

しかし、バスから一歩外を出て、家屋を覗くと、改めてその被害の大きさを感じた。家屋周辺で漂うカビの匂い、窓から垣間見える家屋内の様子。かつて神戸や三宅島や小千谷で何度も見て、やりきれない思いと、えもいわれぬ感覚を覚えた、そこはまさに被災地だった。

残念ながら、家屋の住民にお話を伺う機会はなかった。せめて住民の方がケガなどをせず、生きていて欲しいと願うだけだ。

これらの家屋に住んでいた方にとって、「ハリケーン・カトリーナ」は、忘れてくとも忘れられない大きな出来事であったに違いない。そんな方々を支える支援者のお話を聞く日に、「被災の現場」に触れることができたのは、個人的にはとても意味があったと感じている。

福田信章



被災家屋内の被害はすざましい状況だった

〈編集後記〉

朝からニューオリンズの蒸し暑さを感じるツアー 2 日目となりました。

今日は、それぞれのお立場で復興事業にあたられている方々のお話を聞き、今日 1 日でニューオリンズの実状、課題といったことを、この紙面の中ではお伝えしきれないほど本当に多くのことを学びました。その中で日本とアメリカの復興支援等の様々な違いについての思いがメンバーの頭の中を駆け巡ったことでしょう。

ハリケーン・カトリーナ襲来から 2 年一。

被災後 2 年経過した今も手付かずの空き家が、洪水当時の悲惨さ、被災した人々の思いを私たちに訴えかけていたような気がしてなりません。

吉田裕華

日米災害 NPO 交流研修ツアー 9月4日行程

- 午前 在ニューオリンズ日本国総領事館
— 坂戸総領事からの被災地における現状と課題
— 坂戸総領事との意見交換
被災地視察
— 17th Street Canal
— London Avenue Canal
- 午後 パプティスト・コミュニティ聖職者協議会
— バイロン・ハレル代表からの被災地での取り組み報告
— 担当スタッフとの意見交換
ニューオリンズ市復興管理局
— デビット・コーディー担当職員からのレクチャー

デビット・コーディーさんと領事館職員の方と記念撮影

